
傭兵ドール

わだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵ドール

【Nコード】

N0448T

【作者名】

わだち

【あらすじ】

予備校へ通う途中、突然異世界へ召喚された19歳のサチ。目の前には自称大魔法使いと名乗る男が。元の世界へ戻してくれるはずが、呪文に失敗。気づけばサチは体高15センチのミニム姿に。そのまま無責任に異世界で放り出され、職探し中の傭兵に拾われたのはいいけれど 幸薄いサチの涙、涙の異世界譚。

第一話 「自称大魔法使い」

この世に自称魔法使いと名乗る男ほど胡散臭いものはない、とサチは思う。

おまけに

「ボクの名はマリアン＝シャルル。大魔法使いです」

と自慢げに大までつけられちゃった日には、どうすればいいのだから。

へそで茶を湧かせと。

しかしこの男、マジである。

(どうしよう……)

サチはそろそろ本気で泣きたくなくなった。

自称大魔法使いと名乗る見ず知らずの男は、かれこれ一時間以上も木製の机に向かってなにやらぶつぶつ呟きながら、センター試験を間近に控えた受験生のごとき熱心さでペンを動かしている。

ときどき何かを思い出したようにサチを振り返っては、行儀よく椅子に座ったままのサチを見つめて、

「おっかしいなあ……」

と首を傾げるのだが、サチとしてはおかしいのはお前だよ、と切実に言っただけ。

クレイジー。

ユークレイジーです。

誰か電話すべきだ。今すぐ。警察に。それが病院に(頭の)。

サチはこの一時間そうしていたように、むなしく愛用のケータイを両手でいじくった。

圏外。何度も見ても圏外。これだから海外勢力にシェアを奪われ

ていつたりするのだよ、日本の携帯会社は。圏外とは！

電話もメールもできないケータイに何の存在意義があるのだろうか。
カメラ？

どうやら自分を大魔法使いだと本気で信じているらしい精神異常者を写メして何が楽しいもんか。逆に泣けてくるよ。

（ああ、やばい、冗談じゃなく泣いちゃうかも……）

でも泣くのは嫌いだった。前向きに生きようとか、そんなカッコイイ理由からではなく。軽いトラウマなのだ。昔、初恋の男の子に「泣くとドラえもんに似てるなお前」って言われたから。わりと真剣に。

それが中学生のとき。

以来十九歳になった今でも、自分の丸顔とすぐ赤くなる鼻が密かなコンプレックスになっている。

だから泣かない。でも泣きたい。どうしようもなく泣きたい。そんで大声で叫びたい。

あんた誰よ！ 家に帰せイカれ男！

でも言えない。だって怖いから。もしそれで向こうが逆上してきたら？ 暴力を振るわれるかもしれない。その可能性がないなんて誰に言える？ なんとつて相手は自称く大魔法使いくかもしれないが、サチにとっては完全なく誘拐犯くなのである。

しかも方法が謎だった。

サチはいつもどおり電車に乗って、いつもどおり端っこの席に座ったはずだった。

サチが通う予備校までは、電車で片道三十分の距離だ。いつもその間、浪人生らしくちびちび英単語カードをめくっている。

そしてその日もいつもどおり、Gの単語までめくったところで電車に酔った。慌てて英単語カードをスカートのポケットにしまい、吐き気をこらえるためにぎゅっと両目を閉じたのを覚えている。

時間にして五分もなかったと思う。

それなのに。

(もう大丈夫……たぶん。吐かない……ような気がする)
と、おそろおそろ目を開けたときには、ここにいた。

自称<大魔法使い>と名乗る誘拐犯の自宅らしい、散らかったり
ビングルームに。

ベッドがあるからリビングルームじゃないかも……、という疑問
はこの際はてしなくどうでもいい。

電車に乗っていたはずなのに目を開けると別の場所にいた。

ということについては、すぐに気にしないことにした。あまりに
もわけが分からな過ぎて、脳みそが考えることを拒否したのだ。

基本的にサチはマイナス思考。三步すすんでは四歩さがるタイプ
である。積極的に厄介事に頭を突っ込んで、怖い思いも痛い思いも
したくない。それなら何も考えずにいたほうが、少なくとも精神的
には楽だ。状況的には、何の改善になっていないとしても。

自称大魔法使いと名乗る誘拐犯らしき男 名前忘れた は、
今も猛然と机に屈みこんでペンを動かしている。ペンには小さな羽
がついていて、それが男の指の合間でびよこびよこ揺れているのが
見える。男が何かを呟き、ペンで滑るように弧を描くと、古びた紙
の上で青や黄色の火花が散った。

もちろん、それが<魔法>的な何かであるわけがない だって
<魔法>なんて存在しないはずだから。

(……………違つてたらどうしよう)

記念すべき二十歳の誕生日を目前にして、いちじるしい常識のコ
ペルニクスの転換を強いられるはめになる。

男はどうやら結果がお気に召さなかつたらしい。
疲れたように溜息を吐くと、今度は顔だけでなく身体ごと振り返
って、サチを見た。

不思議な色の瞳でジィツと見つめられるのもこれで何度目だろう。
振り返るたびに、男の目は青だったり、緑に見えたりする。信号と

一緒だ。長すぎる前髪は黒だった。

半眼で見つめられても、サチはびくびくとした不安な視線を返すことしかできない。

そもそも見知らぬ男に誘拐されて　その方法が謎だとしても縛られているわけでもないのに、どうしてわたしはここにじつと座っているんだろう。逃げなくちゃいけないのに。少なくとも、その努力くらいはすべきだったのに。でも、サチは自分にそれができないことも知っていた。逃げようとして、後ろから刺されたら？ ドアには鍵がかかっているかも。どうにかして鍵を開けられたとしても、部屋の外には誘拐犯の仲間がいっぱいいるかも　そんな考えが次から次へと頭をよぎって、結局一歩も動けなくなる。

男は今までよりもずっと長くサチを見つめたあと、左手にもったペン先でトントン、と細い顎の先を叩いた。

そのおそらくは無意識の仕草を見ながら、この人左利きなんだ、とものすごくどうでもいいことを思ってしまった。

「キミにひとつ訊くけど」

初めてまともに話しかけられた。

「ここで一生暮らすってのはどうだろう」

どうだろうと真顔で言われても。

「できればそれは、全力でご遠慮したいと思います……何が何だかさッパリ分からないけど、あの、本当にそろそろ家に帰らないと……」

「……」
男はそうかー、と残念そうに呟いた。

「まあじゃあなんとか元の世界に戻せるようがんばるけどさー、あんまし期待しないでね。ボクとしてはもう一時間もがんばってるわけだし」

いやもつと頑張れよ、お前のせいだろコンチクショー。

と言っかわりに、小声で尋ねた。

「えーと、つまり　何か問題でも……？」

「うん。呪文スベルのさ、組み合わせが多分同じじゃないんだよ。異世界

から召喚するスペルと、元の世界に戻すスペルがさ。やってることは同じだけど、働くエネルギーの方向が逆だからだと思っただけで、今正しい組み合わせを探してるんだけど、実に厄介で。もういい加減飽きてきたぞ」

いやだから飽きてきたぞとか微妙にかわいく言われても。

「困りますわたし……」

サチは俯き、ぼそぼそと言った。

予備校の授業があるし。休んだらせつかく払った授業料がもったいないし。お夕飯の準備もまだだし。朝干した洗濯物もとりこまないと。

「帰してください」

なけなしの勇気を振り絞って顔を上げ、相手の顔をまっすぐに見る。

睨んでいるように見えるといいな、と思うけれど、多分いつもみたいに泣くのを我慢している子供みたいな顔になっていただろう。鼻の奥が熱くなり、視界がじわっと滲んでくる。

「帰してください」

もう一度、言った。

今度ははつきりと声が震えた。

「お願い、します……帰りたい」

帰りたい。もとの世界に。

ここがどこだろうと、そんなことは知りたくなかった。絶対に、知りたくなかった。

「はあ……」

男は少し黙り込んだあと、おもむろに溜息を吐いた。がっくりと細い肩を落とす、長い前髪を左手でかきあげる。こちらを見る眼差しは、どこか途方に暮れているようだった。

「まいったなあ。これじゃボク、完全に悪者じゃない。女の子いじめは趣味じゃないんだよ、信じてくれないかもしれないけど。女の子ってすぐ泣くからいじめ甲斐ないでしょ」

そこかよ。

とは言わずにおいた。

「帰ってあげたいんだよ、ボクとしても。できるかなあって軽い気持ちでやってみたら、できちゃったただけだし」

「え、じゃあ……」

サチは耳を疑い、恐怖も忘れて目を丸くした。

自分がここに連れてこられた方法は謎だけど、つまりは

「特に意味があつてしたわけじゃない、てこと……です、か？」

「うん」

うんって言っちゃったよ！

「全然意味なし。ただ実験？ただだけ。別世界から人間を召喚するなんてフツーできないよ。むりむり」

「でも、あの、わたしここにいますけど……実際に召喚？……されてますけど、」

「うん。ボクって天才だよね」

自慢げになつこりと微笑まれて、サチは両手に顔をうずめた。

ああ。

初めて他人に対して殺意を覚えてしまった……。

何の意味もなく。

ただ誰かの気まぐれでこんなふうにかき乱されてしまう自分の人生が悲しい。あまりに軽い。あまりに情けない。自分で自分の人生にレールを敷くこともできず、他人に敷かれたレールの上をちゃんと走ることもできず、ポツと、ペンの一振りですら自称大魔法使いなる男に何の意味もなく別世界へ連れてこられる。

それがわたし。

ミジンコサチ。

サチは両手に顔をうずめたまま、しくしくと泣き出した。

自称大魔法使いがもう一度、深々と溜息をつく。いいよ、わかったよ。彼のどこか投げやりな声が聞こえ、紙に何かを書きつけるペンの音がした。椅子がきしむ。彼が立ち上がり、変わった刺繍入り

のズボンが目の前にくる。茶色いブーツは長年使っているのか所々色落ちて白くなっていた。あ、鳥の糞……。

「まだいまいち組み合わせに自信ないんだけど。ま、何もしないよりマシか」

そんなに泣くほど帰りたくないじゃあね。

さすがにボクのなけなしの良心が痛む気がするし？

男は呟き、サチの俯いた頭にそっと手を置いた。見なくてもなんとなくわかる。きつと左手。

「えーオホン。それでは詠唱しますよつと、……」

男の口から低く、囁くように、すべらかな歌声が流れて出てくる。サチにはそんなふうに聞こえた。呪文というより、不思議な旋律の歌。異国の子守唄みたいに。

きれいだった。

思わず顔を泣いてぐちゃぐちゃになっている顔のことも忘れ、サチは頭をあげた。

彼の青とも緑ともつかない瞳と長い前髪越しに目が合った瞬間、

「あ」

ポン、という小さな爆発音。

目線が急に低くなり、男の汚れたブーツとズボンが目飛び込んでくる。

永遠のような一瞬の沈黙のあと、

「……ほらね、組み合わせに自信ないって言ったでしょ」
男の妙に言い訳がましい声。

サチはゆるく首を傾げた。頭に触れている手が、奇妙に大きく感じた。辺りが暗く感じるのは男の手で影ができているからで……影？
サチは上向いた。

男の手は、でかかった。

異常にでかかった。

というか。

「あの、わたし……小さく、なってますか、なんか……もしかして……？」

部屋が異様に広く見えるのはなぜだろう。

そして小柄なはずの男が、まるでガリバー旅行記にでてくる巨人のように見えるのは。

「うん、なってるね」

男はあっさり頷いた。

目の上に垂れた前髪を、ふっと息を吹きかけて飛ばす。

「ある意味成功ともいえるよね。だって人間をちっちゃくするなんて、フツーできないよ。むりむり。ボクってどこまで天才なんだろう、自分でもびっくりしちゃうよ」

絶句するサチを上から下までつくづく眺めて、彼は言った。

ダメ押しの一言を、いとも自慢げに。

「ジャスト体高十五センチってところかな。まあなんとか生きていけるよ、がんばれ」

がんばれ。

これほど誠意のこもらない応援の言葉を初めて聞いた。

サチは再びしくしくと泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0448t/>

傭兵ドール

2011年5月6日10時40分発行